

# 自転車と浄水器合体



自転車一体型浄水装置「シクロクリーン」にまたがる勝浦さん。くみ上げられた水は後輪脇の三つのフィルターで綺麗になる＝川崎市中原区で

どいでもすいすい

ペダルをこいで安全な飲み水を……。自転車と一体化したユニークな浄水装置が注目を集めている。大手合成繊維メーカーを定年退職した川崎市中原区の勝浦雄一さん(65)が事業化したところ、東日本大震災を機に全国から注文が相次ぐようになった。海を越え、清潔な水を求める開発途上国でも活躍の場を広げている。【町田結子、写真も】

装置の名は「シクロク社長の勝浦さんを含めてクリーン」。勝浦さんが、わずか3人の企業だ。メーカー在職中に共同開発。スタンドを立てて自転車にした。製造する「日本ベ車をこくと、ペダルと連シック」(同区)は、動したポンプが勢いよく

水をくみ上げ、三つの異なるフィルターを通してゴミや臭い、菌類を取り除く仕組み。濁った泥水も清潔・透明になる。毎分5リットル、1時間で150人分の飲料水を精製。味は元の水に含まれる成分次第という。

強みはプールや池、川、貯水槽など何でも水源となる上、燃料なしでどこへでも移動できること。

1台55万円するが、震災後の被災地だけでなく、防災意識が高まった全国の自治会やマンション管理組合などから1カ月平均5、6台の引き合いがある。

シクロクリーンを構想したきっかけは1995年の阪神大震災。大手メーカーで家庭用浄水器の事業に携わってきた勝浦さんは、破裂した水道管から水が道路にあふれ続けるテレビの映像に言葉を失った。「持ち運べる浄水器さえあれば避難所の人々に水を届けられるのに」

下痢やコレラなど水が原因となる疾病で、世界中で毎年何百万人もの子供たちが命を落としていることにも心が痛んだ。水に関わりながら何もできないことが歯がゆく、定年退職から2年後の2005年、会社を設立し、新型浄水装置を事業化した。国内市場を開拓する

## 東日本大震災 機に注目 ■ 途上国進出

傍ら、途上国支援に取り組みNGOの依頼で東南アジアの医療施設などに納品した。「日本では『非常事態』の水不足が途上国では日常」と知り、海外での事業展開を決意。バングラデシュの首都ダッカ郊外に昨年、シクロクリーン3台を備えた浄水工場を建てた。

同国の浄水器フィルターは菌と一緒にミネラル分も除去してしまうものが一般的だが、シクロクリーンは除菌しながら必要な成分は残すのが特徴。今年6月に同国内で精製した水の販売許可を取得した。今後、飲食店やオフィスなどへの販売を始め、工場も移転して拡張する。

勝浦さんは、スラムの小学校に装置を贈る準備も進めており「自分の飲み水を作ることで、水源の大切さや衛生問題について理解を深めてほしい」と話している。